

記念講演

親鸞聖人の漢字音に見られる諸相

佐々木 勇

ただ今は、丁寧なご紹介をありがとうございました。佐々木でございます。このような伝統ある学会でお話できることを、大変光栄に思っております。学会長の内藤先生、お声をかけてくださいました大会委員長・深川先生、この話のために準備してくださいました皆様に、まず、篤く御礼申しあげます。

本日は、「漢字音」の話をいたします。深川先生から、この学会には馴染みの少ない話題なので初歩から話すように言われております。多くの皆様には始めの部分は退屈なことでしょうが、しばらくおつきあい下さい。

一、「漢字音」

1. 「漢字音」とは

本日は、「漢字音」の語を「日本漢字音」の意味で用います。他に、学術用語として、中国漢字音・朝鮮漢字音・越南漢字音などが用いられています。以下では、「漢字音」と同じ意味で、単に、「字音」「音」と申すこともございます。この「漢字音」は、日常用語として用いられる「音と訓」の、「音」のことだとお考え下さい。

「音」は、中学校の「国語」教科書で、次のように説明されています。

（前略）多くの物や考え方が、その名称（語）と共に日本及び日本語に入ってきました。いつごろ、中国のどの地方から、何と共に（何の名称として）入ってきたかによって音に違いができました。

基本となるのは漢音ですが、伝来が早い語や仏教に関する語には呉音が、禅宗に関する語や調度品に関する語には唐音があります。その語を知らなければ、正しく読めませんね。

（中学校国語 2）〈平成十七年三月検定済み、学校図書〉「語を見抜く 1……………語の読み方」
「語」によって、音が定まっていることを説いています。

2. 「常用漢字表」における「音」

「常用漢字表」（平成二十二年内閣告示第二号）は、常用漢字二一三六字に、二三五二の音と二〇三六の訓とを付しています。その音を、漢音・呉音・唐音などと認定していくと、以下の数となります。認定は、『三省堂五十音引き漢和辞典』（二〇〇四年）の音認定に依りました。

漢音呉音同音一九五〇字、漢音―七五二字、呉音―五三八字、慣用音―九八字、唐音―一四字。

右のとおりで、教科書で「基本となるのは漢音です」とされるほど、漢音が多いわけではありません。

また、「常用漢字表」で、「特別なものか、又は用法のごく狭いもの」として、一段下げて記されている音のみを集めると、「呉音」が過半を占めます。

呉音―七四（「帰依」のエ、「香華」「散華」のゲ、「夏至」のゲなど）、慣用音―二九（「格子」のコウなど）、漢音―二二（「街道」のカイなど）漢呉同音―九（「相殺」のサイなど）、唐音―七（「庫裏」のクなど）。

「常用漢字表」から、現代日本語において、呉音が頻用されない漢字が存することは確認できます。しかしながら、「央（オウ）・応（オウ）・横（オウ）・音（オン）」など、呉音でも、「常用漢字表」の最初の音に掲げられているものは、現代において未だ新語の生産力を持っています。さらに、平成二十二年「常用漢字表」に追加された漢字にも、「臆（オク）・蓋（ガイ）・隙（ゲキ）・捉（ソク）・麵（メン）」など、三十二の呉音が含まれています。よって、呉音は伝来の古い語や仏教語に残存するに過ぎない、という教科書に書かれているような一般認識があるならば、それは改められる必要があります。^①

3. 「漢字音」の「諸相」

右のとおり、「日本漢字音」には、呉音・漢音・唐音などの体系的に異なる音があります。

また、それら呉音・漢音・唐音などの各体系内にも、請来当時の音に近いか否かの相違を持つ諸相が同時代に存した、と考えています。漢音については、この点を明らかにできたと思っております。^②

同時代における音体系に諸相が存する状態とは、現代日本語における英語音の左のような実態を想定しています。

ア．子音で終わったり、子音が続く、英語原音に近い発音

(film・sweet／sweets・team・bed・what など)

イ．本来無い母音を挿入・添加しつつも、英語原音を残そうとする発音

(フィルム・スイート／スイーツ・ティーム・ベッド・ウワッツ など)

ウ．日本語と変わらない発音

(フィルム・スイート／スイーツ・チーム・ベット・ワット など)

二、本日の話のねらい

右の、現代日本語における英語音のような諸相が、鎌倉時代の「呉音」にも存したのかどうか。この点について考えたことを、本日はお話ししたいと思います。

この問いを解き明かすためには、鎌倉時代における各種の呉音資料を調べるという方法があります。漢音の諸相解明について、注(2)拙著ではこの方法を採りました。

しかし、この方法では、諸種の資料によって見られる漢字音の差が、資料の性格による差ではなく、音を記した者が異なるための個人差ではないかという疑問を拭えません。

そこで、各種文献を、同一人が書き残した文献群を分析の対象資料とすることが望ましいことになります。鎌倉時代においては、親鸞(一一七三—一二六二)の著作・遺文こそが最適の資料群です。

三、親鸞自筆の諸資料

親鸞は、庶民に向けて教えを広めるため、多くの漢字に振り仮名を付し、漢字声調(アクセント)を示す声点(後述)をも加点した文献を多く残しています。このうち、字音を示した振り仮名・本文における字音語仮名書き例(「かくねむはう」〈覚念房〉など)と、漢字に加点された声点から知られる字音声調とが、当該期における日本漢字音研究の資料となります。さらに、反切・同音字注の書き込みが見られる資料も存します。加えて、親鸞遺文は、『親鸞聖人真蹟集成』に影印が収められ、いつでも誰でも閲覧可能であり、研究の客観性を保つことができます。

その親鸞遺文の全体は、言語研究上、いかに分類・整理するのが有効でしょうか。認定の揺れを少なくするため、

音読か訓読かと、漢字と仮名の割合とから、日本の古文獻を、次のように分類することができます。⁽⁴⁾

- ① 中国漢文字音直読資料（西本願寺蔵『観無量壽經註・阿弥陀經註』經文部分など）
 - ② 中国漢文訓読資料（『教行信証』中国漢文訓読部分・『浄土論註』など）
 - ③ 日本漢文訓読資料（『教行信証』日本漢文訓読部分など）
 - ④ 片仮名交じり漢字文（『西方指南抄』漢文中心部分など）
 - ⑤ 漢字・片仮名交じり文（『唯信抄（西本願寺本）』など）
 - ⑥ 漢字交じり片仮名文（『唯信鈔文意（専修寺蔵正月十一日本）』など）
 - ⑦ 片仮名専用文（『唯信鈔文意』、『一念多念文意』末文、『三帖和讃』の左注など）
 - ⑧ 漢字・平仮名交じり文（専修寺蔵『唯信鈔（平仮名本）』、書簡〈三・六・八・九・十〉）
 - ⑨ 漢字交じり平仮名文（書簡へ一・二・四・五・七・十一・十二）
- 右の通り、親鸞遺文は①～⑨のすべてに亘って現存します。⁽⁵⁾

四、親鸞遺文における声点の諸相

ただし、右の九種の文獻に、九種の漢字音がそれぞれ区別されていたとは考えられません。

②と③との違いは、本文が中国で作成されたか日本で作られたかの差です。④片仮名交じり漢字文・⑤漢字・片仮名交じり文と⑥漢字交じり片仮名文、および、⑧漢字・平仮名交じり文と⑨漢字交じり平仮名文との差は、漢字と仮名との混用の程度差です。

また、四十八願文や『西方指南抄』漢文部分には、漢文をまず音読し（①字音直読）、次に訓読（②中国漢文訓

読)して、音読した漢字音をそのまま訓読でも活かしている箇所があります(たとえば、『西方指南抄』下末149(真蹟集成863頁)など)。よって、これらの音は、近似していたと考えられます。

では、右の①～⑨の音はすべて同一であったのかというと、そうとも考えられません。

親鸞は、声点しょうてん(アクセント・音声符号)の形式に、以下の三種を区別しているからです。

0.「声点」(しょうてん・せいてん)と「入声」(にっしょう・にゅうせい)

「声点」は、「文字の四隅(またはその中間)に付して、その音節の四声を示す点。」(『国語学大辞典』一九八〇年、東京堂出版)です。漢字左下の点を平声点と呼び、それによって標示される声調を平声調と言います。平声調は、低平調でした。漢字左上の点は上声点であり、上声調は高平調でした。漢字右上の点は去声点で、去声調は上昇調でした。

そして、漢字右下の点が入声点です。入声はp(Φ)・t・kの子音で終わる閉促音です。日本漢字音にも、唇内入声音(ㄹㄱ)「法」^{ホフ}など・喉内入声音(ㅇ)「識」^{シキ}・徳^{トク}など・舌内入声音(ㄷ)「佛」^{ブツ}・窟^{クツ}などの三種があります。⁽⁶⁾

なお、以下に述べる親鸞の声点と、キリシタン資料のローマ字表記などから、舌内入声音(ㄷ)は、室町時代末期まで母音を添えずに発音される場合があった、と言われております。⁽⁷⁾

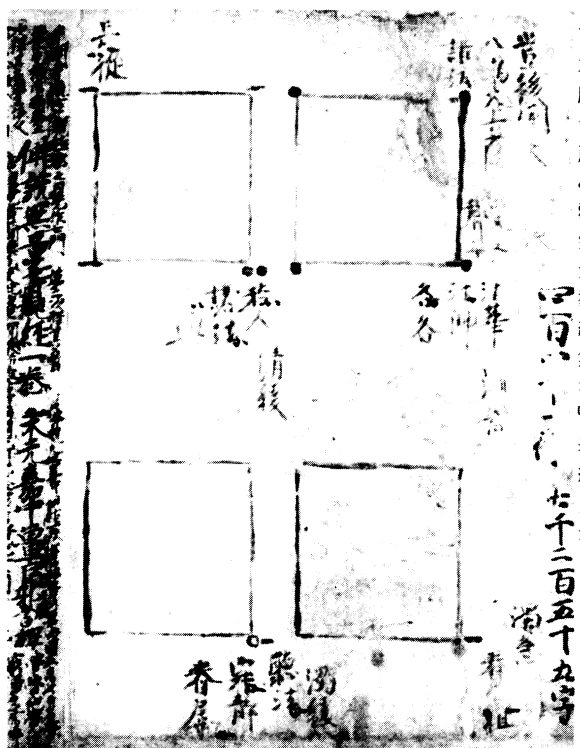
1. 入声に急・緩を区別する声点形式 — 清急「●」・濁急「ㄱ」・清緩「●●」・濁緩「ㄱㄱ」 —

この形式では、清音は「●」、濁音は「ㄱ」で示されます。ただし、入声は、さらに細かく分類され、「清急」^{キウキツ}「●●」、「濁急」^{ダクキツ}「ㄱ」の四種があります。この声点形式で実際に加点されている親鸞遺文は、つぎのaのみです。(以下、右の文献分類①～⑨と真蹟集成の巻をも記します。)

a 西本願寺蔵『阿彌陀經註・觀無量壽經註』經文①（「増補 親鸞聖人真蹟集成」第七卷）

○親鸞の声点図

西本願寺蔵『觀無量壽經集注』表紙見返

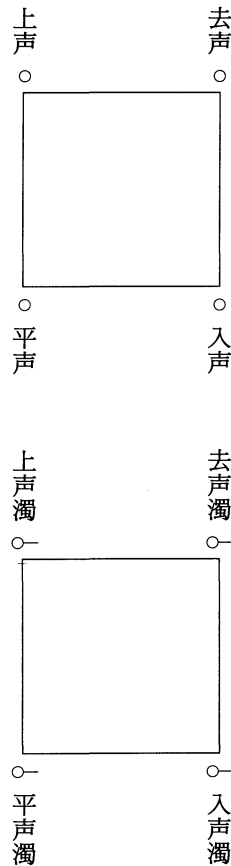


西本願寺蔵『阿彌陀經註・觀無量壽經註』の經本文では、入声の急（清急「●●」・濁急「●●」）は舌内入声音（ㄣ）と促音、入声の緩（清緩「●●」・濁緩「●●」）は喉内入声音（ㄣ・ㄣ）・唇内入声音（ㄣ）に加点されています。⁽⁸⁾

同種の声点図は、西本願寺蔵『唯信抄』と専修寺蔵『浄土高僧和讃』の表紙見返にも見られます。しかし、この二文献の本文には、声点図の通りの入声点は加點されていません。

2. 入声に急・緩を区別しない声点形式 A — 清「○」・濁「《」 —

二つ目は、清声点に「○」、濁声点に「《」を用いる声点形式です。



この形式の声点が加點されているのは、次の親鸞自筆本です。

- b 坂東本『教行信証』②③（第一巻・第二巻）、c 西本願寺蔵『阿彌陀經註・觀無量壽經註』註文②（第七巻）、d 浄土論註朱点②（第七巻）、e 浄土論註付疊鸞伝②（第七巻）、f 大般涅槃經要文・業報差別經文②（第九巻）、g 信微上人御釈③（第九巻）、h 烏龍山師並屠兒寶藏傳③（第九巻）、i 聖覚法印表白文（法專寺蔵）③（第九巻）、j 晨旦國十四代③（第九巻）、k 西方指南抄②③④（第五・六巻）。

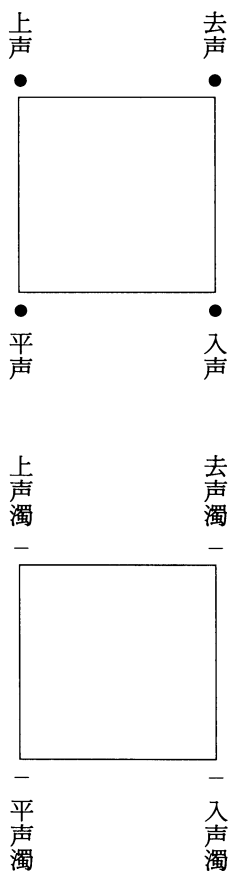
いずれも、本文は漢文または漢語・漢文中心であり、それを訓読した文献です。その訓読の訓点中に、清「○」・濁「《」の声点が用いられています。

c 西本願寺蔵『阿彌陀經・觀無量壽經』註文は、a 西本願寺蔵『阿彌陀經・觀無量壽經』の行間・上下欄・紙背に書き込まれた経論釋等の註文です。同一文献でありながら、註文は訓読され、入声の急・緩を区別しない、清

「○・濁」「○」形式の声点が加点されています。⁽¹⁰⁾

これらの漢文訓読資料では、「●」はヲコト点と、「一」は返点（一二点）の「一」と紛れやすいため、清「○・濁」「○」形式の声点を加点したものでしょう。⁽¹¹⁾

2' 入声に急・緩を区別しない声点形式B — 清「●・濁」「一」
次に、清音は「●」、濁音は「一」とする形式です。この形式も、入声に急・緩を区別しません。声点図に示せば、左の通りです。



この形式の声点が加点されている主なものは、次の諸本です。

1 三帖和讃⑤（第三卷）、m 唯信抄（西本願寺本）⑤（第八卷）、n 唯信鈔（専修寺藏信證本）⑤（第十卷）、o 唯信鈔（東本願寺等藏残卷）⑤（第八卷）、p 唯信抄（最乗寺藏断簡）⑤（第九卷）、q 尊号真像銘文（建長本）⑤（第四卷）、r 尊号真像銘文（正嘉本）⑤（第四卷）、s 皇太子聖德奉讃断簡⑤（第九卷）。

いずれも、全体が⑤漢字・片仮名交じり文であるか、漢字・片仮名交じり文を含みます。

清「●・濁」「一」の声点は、全資料、朱筆で書き込まれています。それら声点の「●」は小さく、墨で記したのでは、文字との区別が判然としないためでしょう。⁽¹²⁾

右の三種（1・2・2'）は、入声に急・緩を区別するか否かで、1と2・2'とに分けられます。⁽¹³⁾ 2と2'との声点形式の相違は、右に申したとおり、本文書記形体の相違から生じたものと考えられます。2と2'の声点が標示している音は、同内容だと思われます。

3. 声点を加点しない文献

右以外に、声点を全く加点しない文献群が存します。

(1) 平易を旨とした漢字交じり片仮名文^⑥

一念多念文意（第四卷）・唯信鈔文意（正月十一日本）（第八卷）・唯信鈔文意（正月二十七日日本）（第十卷）

(2) 短文の漢字交じり片仮名文^⑥

淨肉文・十惡（第九卷）、或人夢〈見聞集Ⅱ〉（第九卷）、法然上人御消息・九条殿北政所あて（第十卷）

(3) 片仮名専用文^⑦

『三帖和讃』（第三卷）の左注、『一念多念文意』『唯信鈔文意』末文（第四卷・第八卷）、など。⁽¹⁴⁾

(4) 漢字・平仮名交じり文^⑧、漢字交じり平仮名文^⑨

専修寺蔵『唯信鈔（平仮名本）』（第八卷）、書簡（第四卷）。

(5) 短文の漢文（名号・抜き書きの類）

諸名号・讃銘（第九卷）、淨土五會念佛略法事儀贊〈見聞集Ⅰ〉（第九卷）、数名目（第九卷）、須彌四域經文（第九卷）、三骨一廟文（第九卷）、曇摩伽菩薩文（第九卷）、聖覺法印表白文〈見聞集Ⅱ〉（第九卷）、御念仏之間用意聖覺返事〈見聞集Ⅱ〉（第九卷）、四十八願文断簡（第九卷）、道綽略傳（第十卷）、大集經・涅槃經文（第十卷）、淨土本縁經文（第十卷）

これら、平易を旨とした漢字交じり片仮名文や仮名を主とする文献(⑥⑦⑧⑨)に声点加点が見られないのは、偶然ではないでしょう。この種の文献に漢字声調を示す必要を、親鸞が認めなかったことを反映していると考えられます。これらの文献における入声音は、舌内入声音を含め、和語と同一の音であつたこと⁽¹⁵⁾でしょう。

五、親鸞遺文から知られる呉音の諸相

以上、呉音読中心の親鸞遺文における声点の分析から、親鸞は、呉音に三種の発音を区別していたと考えられます。その三種とは、次のものです。

ア・舌内入声音(ㄣ)を子音で終わる音

中国漢文字音直読資料(①)の音

イ・舌内入声音(ㄣ)に、喉内入声音(ㄣ・ㄣ)・唇内入声音(ㄣ・ㄣ)と同じく母音を添えるものの、和語「ち・つ」ほどは開音節化しない音

漢文訓読文・漢字中心資料(②③④⑤)の音

ウ・入声音が和語「ち・つ・き・く・う」と同じ音

仮名中心資料(⑥⑦⑧⑨)の音

このイとウとに発音の差が存したかどうか、現在のところ不明です。

しかし、始めに確認したとおり、現代日本語の英語音にも、英語原音に近い音から日本語音と変わらない音までの、少なくとも三層は区別可能です。

親鸞遺文の声点に見られた加点・非加点と加点形式の相違は、これと平衡した発音の相違を反映したものではな

かったか、と考えています。

声点の形式と入声音ばかりでなく、仮名音注や反切も含めた総合的な分析によって、親鸞遺文全体の漢字音を位相論的に捉えることが、現在の私の課題です。

これで、「親鸞聖人の漢字音に見られる諸相」と題した拙い話を終わらせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。

質問者 2の声点加点がされている主な資料として、1からsまでありますけれども、和讃に関連するものとか、あるいはqとかrとか『尊号真像銘文』でこれもたぶん、「正信偈」が関係するかなという思いがするのですけれども、文字で読むと言うよりも唱えていたりとか、耳で聞いたりするものに、声点がついているというふうに考えたときに、『唯信鈔』という書物が実は、耳で聞いたりするような側面が、ここから窺えるのではないかなということを思ったのですけど、そういった可能性というのはないですか？

佐々木先生 はい、ありがとうございます。そうかもしれません。現在、『唯信鈔』を唱えるということはあるのでしょうか？

質問者 いやなくて、普通読むのですけど、ただもともと唱導家っていうのは説法でいろんな所で語っている、そのネタ本ではないかというふうな見方があったりする、そうすると耳で聞いてそのことを書いてるだけじゃなくて、耳で聞いた音をそのまま記録したっていう可能性がなくなっていることを先生のお話を聞いて思いましたので。

佐々木先生 親鸞が加点した発音が伝えられた可能性はありとおもいます。『尊号真像銘文』も銘文だけを、ひと

りが読むのでなしに、皆の前で唱えた、絵を横に置いて唱えたかもしれません。そういうものと同じように、『唯信鈔』も考えてよいのかもしれませんが。

質問者 そういう可能性がたぶん正信偈とかみんなど唱えているとか、耳で聞いているものに、このような音の符号が付いているというふうに、傾向として見る事ができる可能性があるかと思ったところです。

佐々木先生 はい、可能性は有ると思います。お教え、ありがとうございます。

質問者 親鸞聖人がこういうような発音記号を独自に突然作り出されたことはあり得ないのだろうと思うのですけれども、たとえば鎌倉時代以前、日本とか、韓国とか中国を含めて、そういうような発音みたいなものを、何らかの形で示しているようなものは、何かあるのでしょうか。資料的に何か残っているのでしょうか。

佐々木先生 はい、ございます。声点の始まりは、破音点と呼ばれているものです。その破音点は、通常の字の意味とは違う場合に打たれました。それが、通常の字の意味とは違うアクセントをも示すようになり、声点に発展していきます。その古い形は中国の文献にあります。今残っているところでは、七世紀中頃の敦煌文献が最古だと思っています。それが日本に入って参ります。日本の声点加點の一番古いものは、九世紀末の資料です。声点加點資料は、非常に多く残っておりますが、今日ご紹介したような、入声に急・緩を区別した声点加點例は、親鸞とその親鸞加點本を写したと思われる―たとえば、この龍谷大学図書館蔵の浄土三部經、あれは今日の午前中のご発表にもありました、存覚の所持本です。その―存覚所持本浄土三部經など、親鸞の加點本を写したと思われるものにしかありません。この事実のみ見ると、親鸞が用いた形式の声点は、突然出て来ます。しかし、これもご存じの通りに、点図集には「豊後国八幡菩薩（云々の）聲也」と書かれているのでありまして、探せば、前例・類例があると思うのですが、まだ見つけられておりません。

質問者 親鸞聖人の左訓、読みも含めてですけど、それが一体何に基づいているのかというのを一度やってみようというので、親鸞以前にある、いわゆる辞書をとにかく全部調べ上げようというようなことを発想してやってみたのですが、まあこちらの実力不足で、結局読めないとか、それから最終的にわからなかったというのが、なんとも言いようがないというのが結論になってしまったのですけれども、そこらに対してどういうふうに、いわば、こういうような読みと辞書の関係という、何かあるのかないのか、もし考えておられることがあったら、教えてください。

佐々木先生 はい、ありがとうございます。結論から申しますと、わかりません。わかりませんが、親鸞の左註、左訓を集めると、当時の立派な辞書になります。これも先生がなさっているとおりです。当時の名義抄などよりもずいぶんと詳しいものになるわけでして、名義抄などから、引用したことではないのだろうと思います。右側に加點、あるいは上段下段に加點されます仮名の音注も、浄土真宗伝承音といわれる、水を「シキ」、阿を「ワア」「ワ」とするなど、独特のものを含みます。反切についても御研究の方が何人もいらつしやいますが、半分以上は『廣韻』や『玉篇』の反切と一致するものの、不明な部分が残ります。それは何に依っているのか。あるいは、宋版一切経と関係があるのではないかと思って調査を始めているところです。親鸞は、宋版一切経の最初の開寶藏から見ていたことが最近わかってきました。また、親鸞が引用した經文と諸写本・版本の本文とを比較してみますと、宋版一切経の中でも思溪版―鎌倉時代の始めになって大量に輸入されました―の本文と一致していることがわかりました。たとえば、『教行信証』の日藏經・月藏經の部分は、思溪版と最も良く一致します。それなので、思溪版の卷末音義が音注の一つの典故ではなかったのかと考え、調査を始めたところです。

質問者 日本の古い発音というのが正確にどういうものなのか。ちょっと時代が後になるのだろうかと思えますけど

も、ハングル、日葡辞書以前の正確な発音というのは、よくわからないのではないかという思いがあったのですけども、親鸞の当時こういう発音をしていたというのは、やっぱりなかなかわからないものなのではないでしょうか。どうなのでしょうか。

佐々木先生 親鸞が詳しい加点をしてくれた入声点については、このように考えられたというのが、今日の話でした。それ以外の音は、仮名というのが、非常に限界がある、おおよっぱな音表記しかできないものですので、よくはわかりません。古代の発音の推定には、外国資料―キリシタン資料・朝鮮半島のもの―とか、あるいは中国の漢字で日本語を表記した万葉仮名などを使ったり、悉曇資料―梵字で印度の言葉を書いているところに漢字や仮名を当てた資料―を用います。古代印度や古代中国の発音の研究は、それはそれで進んでいますので、それと仮名とを対比させることで、仮名の発音がわかる。その仮名がつけられた漢字の発音がわかる、という具合の方法です。それらを総合して、各研究者が推定している、という段階です。

質問者 今日、呉音の話をずっと聞かせていただいて、始めのところに仏教文献で呉音を用いるのだという話が教科書にもありましたけれども、親鸞聖人は『弁正論』を引用するときに漢音をずっと引用するのですが、何か理由として考えられることはありますでしょうか。

佐々木先生 それについてはかつて書いたことがございます。「親鸞筆『教行信証』の漢音―出現箇所と加点理由―」という論文がインターネット上にございますので、御覧下さい。結論は、当時、弁正論が漢音読されていたから親鸞もそれに倣った、というものです。そのほか、『教行信証』の弁正論のようにまとまった部分でなくとも、たとえば、『西方指南抄』の中にも漢音がしばしば出てまいります。年号であるとか、重源・運慶などの人名であるとか、他の鎌倉時代の文献でも漢音読されている語については、親鸞も漢音を加点しています。仏典、

仏教について述べるからと言って、当時の人に違和感があるような漢語音は使わないということかと思えます。

質問者 『唯心鈔』の表紙裏の一番下に書いてある「舌内字 根コン」と「脣内字 貪トム」、親鸞の時代にはこの音の区別はすでになくなっていたというお話を聞いたのですが、なぜそれほど厳密にと言いますか、丁寧に字音仮名を区別できたのか。それから先ほどの、本来はこう発音するということと、実際に発音されたこととの齟齬というのは考えられないでしょうか。こう発音すべきだけれども、実際はそうでなかったという可能性はないのでしょうか。

佐々木先生 入声字についても、m と n についても、親鸞はどのように発音すべきであると考えていたのだと思います。先ほどこいたいた内藤先生の御論文で、何か辞書を見ていたに違いないと書いてありますが、私もそうだと思います。そして、実際に発音し分けることを、親鸞はできたと思います。だからこそ、三は「サム」と書き、悪が続くと「三悪（サムマク）」と連声した。それに対して、「因縁（インネン）」など n の場合には「ネン」とナ行に連声している。そして、内藤先生がお調べの通り、親鸞はほとんど例外なく、m と n の音を中国語原音の通りに書き分けています。親鸞は、入声の急・緩についても、区別できたと思います。ただし、門徒たちに強要、強制はしなかった。だから、引き継がれていないのだと考えます。親鸞一個人で見れば、理論と実践とは離れていなかった。けれども、当時の親鸞以外の人、すべてとは限りませんが多くの人たちは、親鸞が考えていた理論とは離れた発音をしていたのではないかと考えております。

註

(1) この点については、佐々木勇「日本漢音研究の現在」（『日本語学』第三七六号、二〇一一年三月、明治書院）で述べた。

(2) 佐々木 勇『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』(二〇〇九年、汲古書院)。

(3) 「フィ・スイ」は、*hi・swi*を表記しようとしたものであり、フィ・スイとは異なる発音を指向している、と考える。なお、現代日本語のスイート／スイーツが、英語の単数・複数にすべての場合に対応しているとは考えていない。日本語では発音においても単複を区別せず、*ゝ*終わりの音はツで表記する方が原音に近いという意識があるのではないだろうか。

(4) 仮名交じり文は、判定者によって差が生じる和文体・和漢混淆文体という分類を採らない。山田俊雄「和漢混淆文」(『岩波講座日本語 10 文体』へ一九九七年、岩波書店)、中田祝夫「日本の漢字」第三章(『日本語の世界4』へ一九八二年、中央公論社)、および、三角洋一「和漢混淆文の成立」(『古典日本語の世界』二二へ二〇一一年、東京大学出版会)、参照。④片仮名交じり漢字文は漢字主体(『東大寺諷誦文稿』、今昔物語集等)、⑤漢字・片仮名交じり文は漢字と片仮名がほぼ同率(『発心集』、沙石集等)、⑥漢字交じり片仮名文は片仮名主体(『極楽願往生歌』、法華百座聞書抄等)、⑧漢字・平仮名交じり文は漢字と平仮名がほぼ同率のもの(最明寺本『宝物集』・古今著聞集等)、⑨漢字交じり平仮名文は平仮名主体(土左日記『源氏物語』等)を、それぞれ指す。なお、⑦片仮名専用文は、上引中田著書で、「仮名専用文」(三〇頁以降)とある用語を応用した。『三帖和讃』などの左注に、片仮名のみで、語釈・注文を記すものを指す。

(5) 親鸞が遺した諸文献を、この①～⑨に分類すれば、次のごとくになる(複数に所属するものも有る)。

①字音直読資料——西本願寺蔵『観無量壽經註・阿弥陀經註』經文部分(第七卷)、四十八願文断簡(第九卷)、大集經涅槃經文(第九卷)、『西方指南抄』字音直読部分(第五・六卷)、『尊号真像銘文(正嘉本)』字音直読部分(第四卷)。

②中国漢文訓読資料——『教行信証』中国漢文訓読部分(第一・二卷)、西本願寺蔵『観無量壽經註・阿弥陀經註』註文部分(第七卷)、『浄土論註』朱点(第七卷)、『浄土論註』付疊鸞伝(第七卷)、大般涅槃經要文・業報差別經文(第九卷)、四十八願文断簡(第九卷) 朱点、『西方指南抄』中国漢文訓読部分(第五・六卷)、『浄土三經往生文類(略本)』中国漢文訓読部分(第三卷)、『尊号真像銘文(正嘉本)』中国漢文訓読部分(第四卷)。

③日本漢文訓読資料——『教行信証』日本漢文訓読部分、『聖覚法印表白文(法専寺蔵)』(第九卷)、『御念仏之間用意聖覚返事』、『信微上人御釈』(第九卷)、『鳥龍山師並屠兒寶蔵傳』(第九卷)、『晨旦國十四代』(第九卷)、『西方指

南抄』日本漢文訓読部分(第五・六卷)、『尊号真像銘文(正嘉本)』日本漢文訓読部分(第四卷)。

④片仮名交じり漢字文——『西方指南抄』中本二三三三三三三三等の漢字中心部分(第五・六卷)、疊摩伽菩薩文(第九卷)、須彌四域經文(第九卷)。

⑤漢字・片仮名交じり文——『唯信抄(西本願寺本)』、『唯信鈔(専修寺藏信證本)』、『唯信鈔(東本願寺等藏殘卷)』、『尊号真像銘文(建長本)』(第四卷)、『尊号真像銘文(正嘉本)』漢字・片仮名交じり文部分(第四卷)、『三帖和讃』(第三卷)、『浄土三経往生文類(略本)』漢字・片仮名交じり文部分(第三卷)、『皇太子聖德奉讃断簡』、『西方指南抄』(第五・六卷)。

⑥漢字交じり片仮名文——『唯信鈔文意(専修寺藏正月十一日本)』、『唯信鈔文意(専修寺藏正月二十七日本)』、『一念多念文意』、『見聞集II 或人夢』(九卷)、淨肉文・十惡(第九卷)。

⑦片仮名専用文——『一念多念文意』、『唯信鈔文意』末文(第四卷・第八卷)、『三帖和讃』などの片仮名左注。

⑧漢字・平仮名交じり文——専修寺藏『唯信鈔(平仮名本)』(第八卷)、書簡(三・六・八・九・十)(第四卷)。

⑨漢字交じり平仮名文——書簡(一・二・四・五・七・十一・十二)(第四卷)。

親鸞は、三十代前半の『阿弥陀経・観無量壽経註』から、入滅の九十歳書簡まで、生涯を通して多種の文献を残した。親鸞に限らず、当時の高僧の多くは、このような書記活動を行なったのであろう。親鸞の場合、その多くが今に伝わり、しかも、漢字に読みを付した文献が大部分であるため、漢字音研究資料として貴重である。

(6) 金田一春彦『日本四声古義』(『国語アクセント論叢』(一九五一年十二月、法政大学出版会)、『金田一春彦著作集第九卷』(二〇〇五年、玉川大学出版会)所収)。

(7) 小林芳規『平安時代の平仮名文の表記様式I・II——語の漢字表記を主として——』(『国語学』四四・四五集、一九六一年三月・六月)、土井忠生『吉利支丹文献考』(一九六三年)三一八頁、菅原範夫『室町時代の平仮名資料における一表記法——入声音・促音表記を中心にして——』(『国文学』第六五号、一九七四年十一月)、同『大蔵流狂言資料に見られる平仮名用字法の諸相』(『高知大学学術研究報告 人文科学』第二八卷、一九八〇年三月)、同『中世文書に見る地域言語——『毛利家文書』元就・隆元・輝元文書を中心に——』(『国語国文』第六八巻第五号、一九九九年五月)、浅田健太郎『声明資料における「ずらし表記」の機能を巡って』(『訓点語と訓点資料』第一〇一輯、一九九八年九月)、木田章義『補忘記』の入声』(『均社論叢』一〇、一九八一年一〇月)、岩淵悦太郎『謡曲の謡い方におけ

る入声ツについて」他『国語学論集』（一九七七年、筑摩書房）所収論文・金田一春彦「平曲の音声（上）・（下）」（『音声学会会報』99・101、一九五九年四月・十二月）、奥村三雄『平曲譜本の研究』（一九八一年、桜楓社）、福永静哉「浄土真宗伝承音の研究」（一九六三年、風間書房）、迫野虔徳「文献方言史研究」（一九九八年、清文堂）、等。

- (8) 佐々木勇『親鸞筆「佛説阿彌陀經」「佛説觀無量壽經」の漢字音について』（『比治山大学現代文化学部紀要』創刊号、一九九五年三月）、参照。

- (9) j『晨旦國十四代』は国名が列举されるのみである。なお、親鸞の訓点を移点したものではありません、専修寺藏真佛筆『彌陀經義集』・専修寺藏顯智筆『彌陀經義集』（建長七年へ一二五五）親鸞八十三歳本奥書・永仁元年へ一二九三）書写奥書）・同『聞書』・同『見聞』・専修寺藏真佛・顯智筆『西方指南抄』を加えることができる。

- (10) ただし、本資料には、上声・去声に限り、濁「ㄣ」が使用されている。細字の註文への加点のため、返点・句点と紛れない場合は、「ㄣ」としたのではないかと思われる。

- (11) なお、この「ㄣ」「ㄣ」形式声点であれば目立つため、必ずしも朱にする必要がない。e↘jの声点は墨点であり、k西方指南抄にも墨声点「ㄣ」が二例存する。これら漢文訓読資料への声点加点は、漢字片仮名交じり文のそれと比較して、疎である。たとえば、「見聞集II・涅槃經」（第九卷）訓読点中には墨の「ㄣ」声点が三例のみ、専修寺藏『唯信鈔（平仮名本）』には「ㄣ」の墨声点が一例のみである（『宿誓善』^{67.3}）。少数の声点加点であることも、墨色を変えることなく、目立つ形式を選んだ理由であろう。

また、k『西方指南抄』における声点加点例は、清「ㄣ」・濁「ㄣ」形式を主とし、清音「ㄣ」、濁音「ㄣ」形式を交える。大部の『西方指南抄』に、声点加点例は全七九例しか見られないため、目立つ「ㄣ」・「ㄣ」形式の声点を朱筆で加点したものと考えられる。その中で、清音「ㄣ」、濁音「ㄣ」形式の声点が、④片仮名交じり漢字文・⑤漢字・片仮名交じり文か、②訓読文であっても返点と紛れることのない漢字の右側（去声点・入声点）で、一八例用いられている。

なお、坂東本『教行信証』は、この清「ㄣ」・濁「ㄣ」の加点形式に、入声に急・緩を区別する加点形式（1）が重ねられている。佐々木勇『親鸞使用の声点加点形式について——坂東本『教行信証』声点の位置づけ——』（『訓点語と訓点資料』第129輯、二〇一二年九月）、参照。

- (12) 「ㄣ」が小さいため、そのまま線を延ばせば、後からでも濁「ㄣ」に修正可能である。そのため、意図的に、小さ

な点を打っているものと考えられる。

- (13) このうち、1・2と²とが本文種の相違に基づいて使い分けられていることが、金信昌樹「親鸞と声点―堺真宗寺本『本事讃』について」(『印度学仏教学研究』第四一巻第二号、一九九三年三月)で指摘されている。次の如くである。

親鸞は、書写本を含む漢文撰述と和文撰述とで加点形式が異なる。即ち前者の場合は、「○」「○○」「」」「」の四種類。後者の場合は「○」と「」の二種類である。

同氏「親鸞の声点資料をめぐる諸問題」(『真宗総合研究所研究紀要』第七号、一九八九年二月、同「親鸞の声点資料の研究―『唯信抄』信証本と顕智書写本の比較」(『龍谷大学大学院文学研究科紀要』27、二〇〇五年十二月)にも、同内容の記述が見られる。ただし、私の分類とは異なる。

- (14) 片仮名にも声点を加点することが可能であり、同時代の声点加点例は多い。しかし、親鸞は、片仮名専用文の片仮名に声点を加点していない。

- (15) 佐々木勇「鎌倉時代における舌内入声音の諸相」(『鎌倉時代語研究』第23輯、二〇〇〇年十月)、参照。

〔付記〕

本稿は、平成二十五年十一月五日(火)の龍谷大学真宗学会第六十七回大会(龍谷大学大宮学舎・清和館三階ホール)における講演を文章化したものである。右には、講演後にお招きいただいた懇親会での会話から必要を感じて、補足した部分が残存する。また、講演後の質疑は、編集部に作成いただいた原稿をもとにしている。記して、感謝申し上げたい。